

医師 丸山嘉一

派遣地域: インドネシア

派遣期間: 2004年12月～2005年1月

平成16年12月26日(日)午前7時59分、インドネシア・スマトラ島北端160キロ沖でマグニチュード9.0の地震が発生しました。被災国はインドネシア、スリランカ、インド、タイ、モルディブ、マレーシアから東アフリカ地域の12カ国にわたり、被災者数は死者約273,000人、行方不明者7,200人を含む240万人以上にのぼりました。

再び雪の中を

平成16年12月29日、「去年も雪だったな」と思いながら日赤本社へと急ぎました。昨年のイラン地震に続き、被災地での年越しです。向かった先は震源地に近いインドネシア・スマトラ島西海岸にあるムラボ。雨期とはいえ日中40℃を越す暑さでした。そしてそこは津波により建物がことごとく破壊され、瓦礫の野原と化していました。

12月26日、地震の後、土石流となった海水が数度にわたって流れ込み、人と建物を飲み込みました。推定人口3～4万人のうち死者・不明者は1万人とも2万人とも言われています。強烈な死臭が街を覆う中、インドネシア赤十字(PMI)のスタッフやボランティアらが遺体を回収する作業を続けていました。地域に唯一入院施設を持つチュナディン病院(平屋、70床)は幸いにも無事でした。生き残ったスタッフがあふれる怪我人の応急治療にあたっていました。人手はもちろん足りず、抗生剤や破傷風の薬も底をついていました。1月4日日赤 ERU の救援活動は病院支援から始まりました。

待てど暮らせど・・・

病院は80%以上が外傷患者で占められていました。瓦礫と共に流されたためにおこった骨折、切り傷、刺し傷は、みな傷が激しく化膿して悪臭を放っていました。すでに敗血症や破傷風のため命が危ない患者もいました。不適切に傷口を縫合し塞いでしまったために化膿がひどくなっている患者も大勢いました。

病院はインドネシア NGO、国境なき医師団、シンガポール軍、韓国赤十字そして我々が手伝い運営されていました。しかし、待てど暮らせど ERU 資機材が到着しません。交通網の寸断に加えて、一帯が政府軍と反政府勢力(GAM)とが衝突を繰り返す紛争地帯だったため、外国人の立ち入りが制限され、資機材の搬入もままならない状況だったからです。

遠く離れた避難所に

通訳ボランティアのマスリ君(28)の一言、「僕の村の避難所が大変です。」から“巡回診療”は始まりました。中越地震と同じく、農村型の災害では孤立した被災地が存在するに違いないと考え、我々は赤十字としてはじめて、避難所の調査・診療・医薬品提供のための巡回診療を始めることになりました。

1チーム医師、看護師、通訳の4～5人で自動車に乗り、炎天下の悪路を走りました。穴を掘っただけのトイレ、濁った井戸水、米や麺類ばかりという偏った食事による栄養状態の悪化といった状況下で、避難所には爆発的に感染症が蔓延する危険がありました。マスリ君の地元の避難所では破傷風を発症した女性(16)を発見し、救命に成功することができました。訪れた避難所は13日間で15箇所、のべ30箇所に及びます。

片道 2 時間の行程で、途中の昼食はビスケット、水のみです。車中が唯一の休憩場所。こんな強行軍でもボランティアの通訳、運転手は快く同行してくれました。我々は避難所の詳細なデータをそのまま WHO、UNICEF に引き継ぎました。UNICEF コーディネーターの「次回も被災地に訪れたらまず日赤を探して、一緒に仕事をしよう。」というコメントは最大の賛辞だとうれしく思います。

日赤 ERU 初舞台

津波の怪我人だけでなく、復興作業で傷を負った市民や遺体処理にあたる PMI ボランティアが破傷風に感染することを恐れました。街中には、瓦礫を片付けたり、家を直す姿が絶えません。大半はゴム草履や裸足のまま。足元にはタンや折れた釘、汚水が広がっています。我々は破傷風ワクチンの接種キャンペーンに乗り出しました。「日本の医者がワクチンを打ってくれる。」という口コミが被災者の間で広がり、計 1602 人に破傷風トキソイドを注射することができました。避難所では麻疹の流行が懸念され、麻疹の予防接種が UNICEF 主導で始まりました。避難所を回り 214 人に接種しました。いずれも日赤 ERU 初めての予防接種事業でした。

Aceh menangis —アチェは泣いている

スマトラ島沖地震で発生した巨大津波。高さ 10m、所により 30m に達する津波が数回、インド洋沿岸に押し寄せました。とりわけスマトラ島北端のアチェ特別州西海岸は甚大な被害を受け、州都バンダ・アチェや西アチェ県のムラボなどはほぼ壊滅状態となりました。2月8日現在インドネシアの死亡者は 118,240 人、行方不明者 127,773 人、負傷者は最大で 10 万人とされています。

海辺の住宅街は巨大な爆弾の直撃を受けたかのようです。建物がことごとく破壊され、瓦礫の野原と化しています。津波は、海岸付近を数度にわたって直撃し、土石流となった海水が流れ込んで人と建物を飲み込みました。強烈な死臭が街を覆う中、インドネシア赤十字(PMI)のスタッフやボランティアらが遺体の回収作業を続けていました。

アチェでは古くから災害があったらそこを離れるという教えがありました。一命を取り留めた方たちは縁者のもとに身を寄せ、内陸の村々にあるモスク、学校、役場にある避難所に逃れ窮屈な生活を強いられていました。遠く離れた避難所から毎日片付けに出かけます。瓦礫に埋もれた我が家を見、そこにあった生活を思い途方に暮れている姿を見かけました。崩れたコンクリートの壁に“Aceh menangis—アチェは泣いている”という走り書きがありました。それでもようやく、彼らは立ち上がろうとしています。まだ、私たちは手をさしのべなければなりません。

日本赤十字社の医療救援活動 概要

医療救援チームとしては、日本赤十字社から平成 16 年 12 月より平成 17 年 4 月まで、6 期に渡って計 6 班、78 人が医療チーム(ERU)を組んで派遣され、当医療センターからも医師、看護師が 7 人派遣されました。当初の予定では第 5 班を持って終了する予定でしたが 3 月 28 日にニアス近くで新たにマグニチュード 8.7 規模の地震があり、派遣は延長されました。4 月 8 日に第 6 班がニアス島での救援活動にあたるため出発し、4 月 28 日をもって医療派遣は終了いたしました。



診療を行う丸山医師



ワクチンを運ぶ日赤チーム



津波災害の爪痕